

「ビタカリップ分遣隊へ帰れ。あと、隊長のレターに書いてあるので分かる」

とのこと「さては、先の飛行機のピラ通るか。そういえば、今日は通る敵機も少なく、何となく静かだな」と二人で話し一応ビタカリップの隊へ帰ろうと、その憲兵ボーイと一同帰ることにした。

分遣隊も狐か狸につままれたような格好であったが、分隊からの連絡で結局、敗戦停戦の連絡だったというわけであった。

ここで原田上等兵と二人で心から喜び合い、長谷川少佐にも感謝し、最大の謝礼は天皇陛下に、心からお礼申し上げる気持ちだった。南陸相の「最後の一兵まで戦うべし」とつい一週間前宣言したのを、陛下の「戦いを止めよ」のご一言で戦争が終わったのだ。

一日遅れてワランゴイ河を渡っていたら、敗戦の連絡が届く筈もなく、恐らく二人もボーイも皆戦死だったかも知れない。生きて帰れて本当に有り難いことだった。

ラバウルやその外、南方諸島で戦死した戦友達には、

心から冥福をお祈りいたす次第です。合掌。

南方抑留レンバン島

大分県 羽田野 正義

昭和十八年七月二十日に臨時召集により西部第二十一部隊に応召。第一期検閲終了後十月二十六日動員下令、歩兵第二百二十三連隊第一大隊第二中隊に編入、十月二十九日編成完結。十月三十一日熊本屯営出発、十一月一日門司港出帆、乗船は「福洋丸」三千トン、船団九隻、臺北派遺静第一一九六二部隊吉瀬隊早坂隊、指揮小隊観測三番（野戦重砲測遠機手）が私の任務であった。二等兵。

夏衣袴が支給されているから南方に行くことはまらがないものと思う。

台湾高雄を過ぎて台風が接近。パシー海峡付近では台風に巻き込まれ大変だった。船中は暑さ厳しく汗は通路を流れる程。おまけにA型パラチフス、B型パラ

チフスが發生、將兵の大部分は患者となった。前甲板に特設された左右二十か所のトイレ前は二十人、三十人の行列となり、しきりに起こる便意には百万の敵をも恐れぬ將兵もほとほと困り抜いた。

かつてアフリカの東海岸から奴隸狩りをして連れて帰った船の中はこのようではなかったらう。兵の乗る所は貨物船の中に板で三段にも四段にも棚をかけ、座っても頭がつかえる程度。潜水艦をよけるため大陸沿岸を遠回りしたためか、門司からシンガポール入港まで二十四日間を要した。普通は七日ないし八日位、まさにこの世の地獄であった。

十一月二十四日シンガポール入港、パシルパンジャン兵站宿営、休養し体力の回復につとむ。初めて踏む南方の土地、花や植物の色の鮮明さには眼が覚める程であった。

十一月二十九日同港出帆、十二月二日ジャカルタ寄港、タンジョンペラ宿営、十二月五日ジャカルタ発、汽車でスラバヤへ、ジャワの汽車は割れ木を焚いて走るので夜など火花をあげながら走るようだ。うっかり

すると腕や足に火の粉がとんで来てやけどをする。駅はすばらしく大きく立派、軍用列車への歓迎も盛んであった。十二月六日スラバヤ着、南兵営宿泊。スラバヤは大きく賑やかな町である。

次に行くスンバ島は最前線、広さは四国位、町らしき町もなければ店もない。スラバヤに長く駐留した理由はそんなところにあるのかも知れない。そこには何でもあった。日本のつき餅もあった。すべて驚くほど安価である。朝から外出し腹一杯食べて飲んで一円にもならなかった。

十二月二十二日スラバヤ出帆。

十二月二十六日、スンバ島ワインガップ上陸、カワソゴ宿営、揚陸作業。

昭和十九年一月一日ハウマラにて新年を迎える。門司出帆以来五十六日で目的地到着、ここが基地になるかも知れぬ。一等兵に進級す。

以後、要所要所に陣地構築、道路建設、自活農園の経営に汗を流す。陣地は山をくりぬいて爆風を避けるため電光形に掘る。スンバ島はサンゴ礁の島ゆえ岩が

硬く小さい穴があいているのでダイナマイトが効かない、難工事であった。六月に上等兵に進級。

島には馬が何万頭と放牧されている。大部分が酋長の所有らしい。酋長の娘と結婚したい者は馬なら三百頭、水牛なら五百頭を持参しなければならない。日本の兵隊さんなら馬も牛もいらなと言った。

輸送船の中で教育を受けた。島にはサソリがいる。刺されたら死ぬ。現地人は左の手を不浄の手としている。どんなことがあっても左手でたいたいたり、なでたりするなど言われた。島に着いて注意してみると、木にサソリが登っている。石をはぐれば下にいる。いつか石をかかえようと手を差し込んだらサソリにやられた。下駄をはいて入るドラム缶の風呂を掃除しようとしたら、そのふちにおいて刺されたが死ななかつた。半日位手がしびれた位、小さなサソリだったからかも知れない。

十号演習参加、昭和二十年一月兵長になる。

戦局好転せず、内地を守る時をかせぐため南方に展開している将兵をマライに集結、一大決戦をいどむと

いう主旨らしい。

我が部隊は二月十四日スンバ島を出発、島づたいにマライに向かった。ダイハツで海を渡る時敵潜水艦が浮上、攻撃を受け戦友八名と馬が犠牲になった。スンバワ、ロンボック、バリ島と渡って行ったが、バリ島は世界の楽園と言われ物資が豊富、気候も良く申し分なし。バリ島おどりは世界的に有名。二晩宿営休養した。

バリ島からスラバヤ、ボゴールへ、ボゴールに一月位いた。世界一と言う植物園がある。すばらしいボゴール宮殿も見学した。

ジャカルタから船でシンガポールへ、汽車でジョホールバルへ移駐したのは、六月二十四日で約四か月を要した。

六月二十九日第七方面軍（岡）直轄砲兵隊に編入、七月三十日トムソンロード兵舎に移駐。

終戦まで、クワンタンに陣地を構築する。クワンタン沖の海戦でも有名。またここは世界でも有名なパインアップルの産地、一望水平線までパインばかり、帰

りはクアラランブルに出て汽車で帰る（割木汽車、山火事）。

八・一五 終戦命令。トムソンロード兵舎はシンガポール放送局の真下にあったから玉音放送は良く聞き取れた。みんな泣いた。中隊長は涙ながら全員一丸となり自重自愛、今後予想される苦難に打ち勝って日本に帰ろうと訴えた。

早速、英軍司令部より命令が来た。「すべての物を破壊すべからず。違反した者、部隊は戦犯に処す」。中隊も兵も不用なもの、問題になりそうなのは焼いた中にはなにもかも焼く兵もあった。軍用紙幣が無効になると言うのでみな出し合い代表が武装して買物に行き、その夜はやるせない気持ちの宴をほった。デマが飛び出すのは軍隊の常で、翌朝四〜五人がいなくなつた。トラックに油、食糧、軽機、弾薬を積みマライ、中国、朝鮮を通過して日本へ帰ると言って夜中に出発したという。結局これはマライ半島の中ほどで共産軍に押さえられ、兵だけ送り返されて来た。

日本軍はシンガポールの一角に膨大な物資と真中に

邦人、軍属、まわりに軍人の集結地をつくり復員を待つ計画で、その作業を進めていたさなかに「すべての荷物を持ちジョホールの陸橋を渡り〇〇を通過すべし。反した者は戦時捕虜とする」という命令である。死の行軍の本間將軍の報復である。中隊では分隊ごとに荷車を作り、それに一切乗せ、引張って行軍した。その間次から次へと出る命令のまま馬來半島を北上した。

食糧は欠乏した。兵は車で積んだ荷物から何かを出し、原住民と食糧の物々交換をし、たけのこ生活をした。炊事は中隊炊事、それぞれ手分けをして野草や魚何でも食える物を集めた。朝バナナ園に行くとデンデシ虫が一本の木に何百と登っている。三人で一組となり、二人でドンゴロスを担ぎ、一人が袋の中にこそぎ取る。使い道は「タニシ」と同じようにゆがいて「おじゃ」などにする。宿舎は川に近い山の中、二人で組んで木の葉を敷き、一人の天幕をその上に敷き、雨よけに一人のテントを上に張る。夜スコールでも来るとずぶ濡れ、それでも病気になるなかつたのが不思議である。

この行軍の途中、命令でメルシンの兵營に作業隊に出た。荒れた兵營の大掃除や復旧作業で、草刈りや除草、テニスコートローラー引き、材木運搬とんでもやらされた。弾丸を込めた印度兵が五人に一人位の割合で監督し、やかましく言う。ある日炊事場附近の除草をしていると水筒を持ってこちらに來いとゼスチャーする。七、八人で行くといルクを一杯入れてくれた。そのような時には印度兵はうまく連絡をとり、要所要所を見張りして、英軍將校にわからないようにしている（英人は百人に一人ぐらい）。

十一月十一日クルアン検問所に入る。ここは大きな飛行場である。黒いテント、白いテントが無数に立てられている。

持ち物の検査がある。最低必需品のみ持ってよい。口頭尋問もある。いらぬことをしゃべると、本人だけでなく、みんなが黒か灰色のテントに入らねばならぬ。黒には最も重い戦犯が入れられる。大変心配した難関も突破した。

クルアンからシンガポール、そこから船で南へ、赤

道直下のレンバン島へ、レンバン島は無人島である。面積は大分県朝地町の広さくらい、駐留地は島の北端、ジャングルを踏み分けてキタセンブに着いた。ジャングルを切り払い兵舎を建て、自活農園を拓き英軍命令による道路作業にも出る。狭いレンバン島に七万もの兵隊が入って來たので野菜代用の野草、海草、木の芽など二、三日で取り尽くしてしまった。自活農園には、胡瓜、さつまいも、タピオカなど植えた。

この島には第一次大戦に敗れたドイツ兵が抑留されていたというので、さつまいもそのなごりかも知れない。山野をはいまわっている蔓を切り取って植えればよい。最も肝心な米は虫のついた南方米で、一日百グラム、小さな湯のみ茶碗一杯ぐらいで、これではとうてい足りない。みな真剣になって栄養カロリーの取れる魚、野草、海草などを集めるのに苦勞した。魚取りではオコゼに刺され一晩中うめいていた下士官もいた。暑いから日に三回マンデー（水浴）に行く。フンドシを広げてメダカをすくいとる。

メダカすら 何かロリーと すくいとる

トカゲすら 蒲焼きにする レンバン島

カロリー、カロリーで明け暮れているうち、ほとんど全員栄養失調となり、少しの坂でも何回も立ち止まらなければ登れない。杖をつかねば歩けない。杖を二本つかねば歩けない寝たきり兵隊も多くなった。栄養失調は恐ろしい。顔や足がふくれてくる。力が出ない。昭和二十年十一月十三日レンバン島にながされ、十二月、一月、二月、三月は最も危険な状態になった。

抑留兵の健康状態が極めて危険なことを知った英軍は、太平洋糧秣オーシャンオペレッター、パンフィックレーション、ジャングルレーションなどを日本兵に支給してきた。内容品はどれも似たりよったりであるが、例をあげると煙草一箱、マッチ、ビスケツト八枚、チーズ、チョコレート、フルーツバーまたはオートミール、アメ玉数個、チューインガム数個、マテリア予防薬、キニーネ、胃腸薬丸薬、チリ紙がきちんと入っている。アルミの四角な缶詰となっている。英軍の二食分を日本兵は三食で食う計算で支給される。この食べ方は各人の創意工夫に任され、物々交換、さて

は空き缶利用の芸術品、内地への土産品が作られ、活況を呈し、健康も回復、明るくなった。自活農園の胡瓜、芋などもとれるようになった頃うれしい命令。

六月十四日、第二十二船団で千島港発日本へ引揚出帆。乗船はリバティ号（米国防時標準型船七千トン）。

この船に乗るには病人以外は船首にかけられた繩はしご使用が義務付けられている。がらくた荷物を背に、長いはしごを登ることはこの上ない苦勞であった。途中で力つき下のダイハツや海に落ちる。またやりなおす者もいた。私の生涯でこれほど苦勞したことはない。やっと登りついて船室に横たわり、やれやれこれで日本に帰れると思う一方、全身から脂汗が二、三時間ものにじみ出た。

リバティ号はバシー海峡を通り、台湾の東側、陸地も見えず、進むうち種子島が左手に、豊後水道の入口で佐賀関の煙突が見え故郷に近づいて嬉しかった。船中で伍長任官。

六月二十八日午前九時宇品上陸、DDTの散布消毒を受け、三百円と切符を買った。びわや甘味品を買っ

て使ってしまった解散。瓦礫の広島を通過してそれぞれ故郷へ。

二度と日本の土を踏むことは九分九厘無いものと覚悟を決めていたのが不思議にも命ながらえ帰って来た。老いた母も健在であった。二番目の姉の家は義弟戦死。三番目の姉の家は義弟三名戦死、妹は夫と義弟戦死、小さい隣保班でも二人戦死した。

何百万の若者と巨額な物資、財産、施設あらゆるものを失ったこの戦争、返す返すも遺囑千万である。

私は昭和十一年徴兵検査丙種合格、水泳は全然だめで金づち、海は苦手であるが、船には絶対酔わない。それに煙草の味が分からず苦勞しなかった。